

## 中世スコットランドのピクト王国

### The Pictish Kingdom in the Medieval Scotland

久保田 義 弘

---

#### 要旨と目次

本稿は、ローマ帝国がブリテン島から撤退した5世紀はじめから8世紀末のヴァイキングの襲来までのスコットランドにおいて、ピクト人の活動、ピクト人によって形成されたアルバ王国、ならびに、中世中期の中央集権的なアサル王朝の成立の一翼を担ったキリスト教についての一考察である。

第1節では、6世紀から8世紀前半のピクト王国を、ブリディ1世から7世紀初めのネフタン2世、次に、タロルガン1世とブリディ3世によるノーザンブリア王国との連携から対立、そしてピクト王国の独立をブリディ4世とネフタン4世兄弟の治世によって概観する。第2節では、オエンガス1世とコンスタンティン王、およびオエンガス2世の治世からピクト王国を概観する。

(キーワード：ピクト人、ブリディ1世、ネフタン1世、ネフタン2世、ブリディ3世、ネフタン4世、ブリディ4世、オエンガス1世、ダル・リアダ王国、ノーザンブリア王国、聖アンドリュー、コンスタンティン王、)

#### はじめに：ピクト人の社会と生活

ピクト人<sup>1</sup>は、ローマ人にブリテンが征服される以前から10世紀後半まで、現在のスコッ

---

<sup>1</sup> ピクトという呼び名は、ブリテン島の征服帝国ローマがつけたものであり、ピクト人自身が彼らをどのように呼んでいたかは不明である。ピクト人は文字を持たなかった民族である。ラテン語の“picti”は、塗られた、あるいは、入れ墨をした人々を意味した。ウェールズ語では、ピクト人は“Fichti”と書かれる。またアイルランドの書物では、ピクト人やアルスターのウルズ地域に住んでいた人々の集まりは、“Cruthin”、“Cruthini”などと書かれている。現代のアイルランド語では、Cruithneと記述される。Cruthinは、Qゲール語のQritaniから派生したと言われている。これはPゲール語の“Britanni”に当たる。これから、Cruthinは、ローマに征服されたブリタニアの外に住んでいたブリトン人を意味していたと解釈できる。

トランド北部および東部スコットランドに居住していた。彼らは、主に、フォース川およびクライド川の北側に生活していた。彼らには、書き言葉がなく、すでに消滅したと思われるピクト語を話していたと思われる。そのピクト語は、ブリトン人が話していたブリテン語によく似ていると思われる。しかし、ピクト語についてはよく知られていない。ピクト人の日常生活についてもよく分からないのが現状であるが、彼らはアイルランド人やアングロ・サクソン人と同じような生活をしていたと思われる。遺跡発掘で彼らの生活の一端が理解される。それによると、ピクト人の土地で水車製粉場が見つかっている。ピクト人は、小さな社会を形成<sup>2</sup>していた農耕民であった。彼らは、小麦、大麦、カラス麦やライ麦などの穀類、キャベツ、タマネギと白ネギ、エンドウ豆や各種の豆、カブやニンジンなどの野菜を育て食する生活をし、同時に、多数の羊や豚を飼い、牧畜生活をし、犬や鷹をともなった狩猟を行い、移動していた。羊毛や獣皮が衣服に利用された。海岸や川では、魚や貝やアザラシや鯨などを捕獲していた。彼らの資産や名声は、牛やイングランドから輸入された馬によって示された。彼らの住宅は、丸い家と、四角形の木製の集会場が一般的であったと思われる。また、ピクト人は入れ墨をしていたと言われている。また、初期のピクト人の宗教は多神教であったと思われる。彼らがキリスト教にいつ改宗したのかは定かではないが、彼らには守護神を持つ伝統があった。

考古学研究によって、6世紀には彼らがキリスト教に改宗するために建てられた修道院の遺跡が見つけられた<sup>3</sup>。6世紀後半からのピクト人の歴史は、『Annals of Ulster』、『Annals of Tigernach』、ならびに『Chronicon Scotorum』などのアイルランド年代記、ベダの『Historia ecclesiastica gentis Anglorum』、アドムナンの『Life of Saint Columba (聖コロンバの生涯)』等から知られる。また、『Duan Albanach』によると、ピクト人の土地には7つの王国<sup>4</sup>があったと言われている。それは、カイト(Cait; 現在のケイブネスやサザランド)、ケ(Ce; 現在のマーヤバハン)、キルキンあるいはシルシン(Circinn; 現在のアンガスやマーン)、フィ

<sup>2</sup> 町 (towns) は、12世紀まで形成されない。ピクト人の人口密集した定住地は知られていない。王宮の周りには比較的大きな定住地があったと思われる。

<sup>3</sup> スコットランドのハイランド地域の東ロスにある小さな漁村ポートマオマック (Portmahomack) に6世紀後半のはじめごろにキリスト教修道院共同体があったことを示す考古学的遺跡が発見された。このときのピクト王は、ブリイディ1世(あるいはブルード1世) (BrideiあるいはBruidhe I) (584年、586年あるいは588年没)で、すでにブリイディ(ブルード)王がキリスト教に改宗していたのか、あるいは、聖コロンバ (Saint Columba) (521年生-597年没)による布教活動の結果、彼が改宗したのかどうかは分からない。因みに、このとき、ブリイディ(ブルード)王はピクト人唯一の王ではなかった。『Annals of Ulster』には、ピクト王ケナラス (Cennalath)の死が580年に言及されている。だが、この王については、名前以外のことは少しも分かってはいない。

<sup>4</sup> その7つの王国に従属する国(下位の王国)もあったと考えられる。また、オークニ諸島にも王国があった。これは、多分、ブリイディ王の従属国であったろうと思われる。

ブ (Fib; 現在のファイブ), フィダッハ (Fidach; 現在のどこかは分からない), フォトラ (Fotla; 現在のアサル), フォトリウ (Fotriu; 現在のマリーヤロス)<sup>5</sup>である。その代表として、マリ湾周辺で活動した北方ピクト人 (フォトリウ) とストラスモア周辺で活動した南方ピクト人の大きな王国 (シルシン, フィブ, フィダハ) があったと考えられる。この中で最も強力な王国が、フォトリウ (Fortriu) であった。アイルランドの年代記では、ピクト王はフォトリウ王を意味した。8世紀の中旬には、ファーガスの息子オエンガス1世がピクト王国を統一し、ダル・リアダ王国を従属させた。760年代以降もダル・リアダ王国は存続したが、6世紀全盛期の勢力を取り戻すことはなかった。ファーガスの息子コンスタンティン (Caustantín mac Fergusa) は、彼の息子をダル・リアダの国王にし、アルト・カルト王国を征服しようとしたが、ヴァイキングの侵攻のため、両国も勢力を失い、この国では新たな為政者の出現が必須であった。ピクト王国は、徐々にダル・リアダ王国と融合し、ノーザンブリア王国の政治的影響を受けながら、アルバ王国に変容したと考えられる。そして、ストラスクライド地域のブリトン人のアルト・カルト王国やアングル人の王国ベルニシア王国を吸収し、アルバ王国は拡大し、11世紀にはピクト人のアイデンティティとスコット人のアイデンティティが融合・混合して、一つの独立国に変貌したのではないであろうか。

### 第1節 6世紀後半から8世紀前半のピクト王国

『Pictish Chronicle』からピクト王の系図を知ることができる。また、その中に含まれる『Poppleton Manuscript』<sup>6</sup>から王の事績の一端を知ることができる。これらの資料とアイルランドの資料『Annals of Ulster』や『Annals of Tigernach』などから、ピクト人とピクト王国を探ってみよう。言うまでもなく、その描写はピクト人やピクト王国のごく一端にすぎない。以下の展開は、限られた資料からの推論であり、かつ、論述である。

<sup>5</sup> 以前には、フォトリウ (Fortriu) の所在地は、パースおよび南ストラスアーン周辺に当たると思われていた。最近では、Alex Woolf の研究によって、北部スコットランドのマリーヤロスの東部周辺がフォトリウの活動の中心であったのではないかと考えられている。また、語源的には、ローマの著者によって与えられたピクト人の1つが、“Uerturione”であった。これから、Uerturio が作られ、ブリトン語では、UあるいはVがFとなるので、ferturio となり、Fortriu と変化したと推測されている。

<sup>6</sup> これは、Poppleton のロバートによって編纂された14世紀の写本であり、色々な作品 (例えば、世界地図、Geoffrey of Monmouth, ウェールズの Gerald などの作品) を含んでいた。これには継続する7つの中世スコットランドに関する記事が含まれていることにために有名である。それには、『Pictish Chronicle』の一部、『Chronicle of the Kings of Alba』およびダル・リアダとピクト王国の王のリストなどが記されている。

## 1.1 6世紀後半から7世紀初め；ブリイディ1世からネフタン2世まで

### 1.1.1 ブリイディ1世とその事績

『Pictish Chronicle』には、ピクト王国の王の系図が示されているが、ガラム・ケナルス (Galam Cennalath) 王まではその在位期間が不明で、多くは王名だけが報告されている。また、ガラム王まではアイルランドの資料にも触れられていなく、『Annals of Ulster』および『Annals of Tigernach』にその王の死亡年が580年と報告されている。

次の王は、ブリイディ (ブルード) 1世 (Bridei IあるいはBruide IあるいはBridei son of Maelchon)<sup>7</sup> (在位560年?-584年あるいは586年) で、『Annals of Ulster』では、“the migration before Máelchú’s son i.e. King Bruide”と報告され、また、『Annals of Tigernach』には、558年に“the flight of the scots before Bruide son of Máelchú”と報告<sup>8</sup>されている。ブリイディ1世は、558年にはピクト王国を治めていた (共同統治していた) のかも知れない、あるいは、ピクト王国の王子であったのかも知れない。アドムナン (Adomnán) (627年あるいは628年生-704年没) の『Life of Saint Columba (聖コロンバの生涯)』には、ブリイディ王の王宮にはオークニ諸島の彼の従属王がいたことが示され、『Annals of Ulster』には彼の治世の間に2度オークニに遠征していることが報告されている。彼の王宮は、確実ではないが、『聖コロンバの生涯』から、ネス川 (River Ness) の近くで、険しい岩の頂上にあっただと思われる。一つの説として、石器時代のピクトにおけるクレイグ・ファドリク (Craig Phadrig)<sup>9</sup> に彼の宮廷が位置していたのではないかと想定されている。クレイグ・ファドリク

<sup>7</sup> ブリイディ王がグウィネズ王国の王マエルギン・ヒール (Maelgwn Hir) (547年没) の息子であるとジョン・モリスの『Age of Arthur』では示唆されているが、歴史家は信じていない。しかし、彼の父親と思われる Maelchon がいかなる人物かは不明である。

<sup>8</sup> 『Annals of Ulster』では、スコットとの戦いの年を505年にしているが、それは誤りであろう。また、このブリイディ1世の前から逃げたのは誰であろうか。一つの解釈として、『Annals of Ulster』から、その頃のダル・リアダ王国の王は、ドマンガイルトの息子ガブラーン (Gabraán mac Domangairt) (在位540年頃-560年頃) であろうと解釈できる。彼は、『Annals of Ulster』によると、ブリイディ1世との戦いで死亡している。因みに、彼は、ダル・リアダ王国に王 (king) を提供した Cenél nGabraín 家系の先祖である。ガブラーンの王位は、彼の兄弟のドマンガイルトの息子ゴナル・マック・コムゲール (Conall mac Comgaill) (在位558年頃-574年) に後継された。

<sup>9</sup> クレイグ・ファドリク (Craig Phadrig) は、インヴァネスから2.5キロメートルの所にある山頂の砦である。そこは Beaully 湾を望む所にあっただ。城壁に囲まれた矩形の砦の広さは、縦75メートル、横23メートルである。この砦は、放射性炭素による年代法では、紀元前5世紀から4世紀に建てられた。その敷地には、2つの険しい城壁があっただ。これは、木材で飾れた石造物であり、そして燃やされ、ガラス状になっている。現在、城砦が草で覆われ、その内側の城壁の高さは、外側では4メートル、その内側では1メートルである。壊れた城壁の幅は10メートルである。この内側の城砦の入り口は見あたらない。その外側の城壁の傾斜はより緩やかであり、その東の端に塚があっただ。

内側の城砦の調査がなされている。この調査では、その壁の幅は6メートル、その高さが8メートルあっただと思われる。城壁は中心に瓦礫を含んでいる2つの擁壁 (護岸) からなる。全ての石は地元のものが使

は、インヴァネスの近くで、かつ、ネス川の近くに位置していた。一つのトピックスとして、ブリディ王はキリスト教徒であったのか、あるいは、いつキリスト教に改宗し、誰が洗礼したのかが取りあげられる。『聖コロンバの生涯』では、聖コロンバが北部ピクト人にキリスト教を布教したが、ブリディ王をキリスト教に改宗したかどうかについては言及されていない。通常、聖コロンバがブリディ王をキリスト教徒に改宗したと考えられている。ポートマホマック (Portmahomack)<sup>10</sup> の発掘で、そこに 550 年頃に始まり、800 年頃に火事で破壊された修道院があったことが明らかになった。この 550 年頃は丁度ブリディ王が活動していた時期と重なり、ブリディ王はキリスト教徒であったという推測を裏付ける。ただ、聖コロンバによって彼がキリスト教に改宗したかどうかは確定できない。

### 1.1.2 ガルトナイト 2 世とその事績

次の王は、ガルトナイト 2 世 (Gartnait II あるいは Gartnait son of Domelch) (在位 584 あるいは 586 年-599 年) であった。ガルトナイト 2 世もブリディ 1 世と同様に、彼の宮廷をインヴァネスのネス川の近くのクレイグ・ファドリクに置いていたと推定される。ポートマホマックに宗教の拠点をおいたと考えられるが、しかし、それを裏付ける証拠あるいは確証はない。彼をアバーネシー (Abernethy)<sup>11</sup> に修道院を建立した王とする説がある。しかし、一般に、その設立者としてウエルブの甥 (あるいは孫あるいは息子) ネフタン 2 世 (Nechtan II : Nechtan nepos Uerb) あるいはネフタン王 (Nechtan 1 : Nechtan son of Erip あるいは Nechtan Morbet) (在位期間不明) が考えられている。

彼は『Pictish Chronicle』のピクト王の系図に示され、また、『Annals of Tigernach』では、彼の死を 599 年と報告している。『Senchus fer n-Alba』 (The History of the men of

---

用され、城壁は芝生の上に築かれていて、何の基礎も入れられていない。城壁は基礎の壁のおよそ 3 分の 1 であり、上に行くにつれて徐々に薄くなる。その下は、ブロックで作られ、屢々、木材のレースがデザインされた。城壁から中心に向かう木材の梁が見付かっている。この梁は、壁の外側が破られる時に、その中心まで達することを妨げている。

そこで発見される骨の調査から、その骨の比率では赤鹿やトナカイの比率が高く、イノシシのものもみつかっている。

<sup>10</sup> ポートマホマック (Portmahomack) は、東ロスのタルバット半島 (Tarbat Peninsula) の小さな漁村である。ポートマホマックは、ピクト人の修道院が確認される最初の敷地である。

<sup>11</sup> アバーネシー (Abernethy) は、ピクト王国の都市、パース (Perth) の南東 13 km にある。ここに立っている教区教会は、ピクト王国のネフタン王によって聖ブリジッド (Saint Brigid) (453 年-524 年) に与えられた。最初の教会は 460 年頃に創建され、さらに、590 年頃に聖コロンバによって復興された。この教会は、修道士がピクトの人々にキリスト教を伝道するための修道院になった。アバーネシーの知の拠点としての名声が高まるにつれて、ピクト王によって首都に選ばれ、ピクト王国の司教はそこに席を置くようになった。その中にはネフタン王がいた。聖ブリジッドの生きていた年代との関係から、Nechtan son of Erib (Nechtan Morbet) がアバーネシーに修道院を設立したと考えられる。

Scotland)<sup>12</sup> に基づいて、彼がダル・リアダ王国のアイダーン王 (A'edán mac Gabráin) (在位 574 年? -608 年) の息子とする説がある。7 世紀から 8 世紀初めの間、スカイ島で活躍するガルトナイトの一族がいたので、このガルトナイトという人物をアイダーンの息子のガルトナイトと同一人物であるとする説がある<sup>13</sup>。

### 1.1.3 ネフタン 2 世とその事績

次の王は、ネフタン 2 世 (Nechtan II ; Nechtan nepes Uerb<sup>14</sup>) (在位 597 年-617 年?) であった。『Pictish Chronicle』では、ウエルブの甥ネフタン (Nechtan nepos Uerb) はピクトの土地を 20 から 21 年の間治めた王で、彼の前王はガルトナイト (Gartnait) であると報告されている。このネフタンがアルト・カルト王国のネスオン (Neithon son of Guipno) (在位期間不明; 620 年没?) と同一人物であるという説がある。もしこの説が正しければ、ピクト王国とアルト・カルト王国は血縁関係、あるいは、ピクト王国とアルト・カルト王国は支配・被支配の関係、あるいは、従属・被従属の関係、あるいは、ピクト王国のネフタン王がアルト・カルト王国の王となる「同君連合」の関係の何れかであったと考えられる。ただ、「同君連合」の場合、それぞれの王国が独自の外交、軍事、財政の裁量権を保持していたのか、それともピクト王国あるいはアルト・カルト王国のいずれに中央政府が置かれたかは不明である。

Uerb は女性の名であろうから、ピクト王国には Uerb と Nechtan の関係が重要であって、彼が Guipno の息子であるかどうかは関心事ではなかったと解釈できる。アルト・カルト王国のネスオンとピクト王国のウエルブの甥ネフタン (Nechtan nepos Uerb) とが同一人物であっても矛盾はしない。さらに、もしネスオンがベリー 1 世 (Beli I) の父であるならば、両者が同一人物である可能性が高くなる。というのは、アルト・カルト王国の Beli 1 世 (Beli son of Neithon) の息子の Bridei がピクト王ブリイディ 3 世 (Bridei III) になっている。この場合、アルト・カルト王国とピクト王国の関係がより深いと解釈される。

『Annals of Ulster』には、Nechtan son of Canu が 621 年に死んだとあり、さらに、『Senchus

<sup>12</sup> これは、10 世紀に編纂された中世アイルランドの本文であり、ラテン語で書かれた 7 世紀の記録から生じている。それは、ダル・リアダ王家の系図およびその王国などの勢力調査を与える。

<sup>13</sup> 最近の研究から、アイダーン王の息子にはガルトナイト (Gartnait) は存在していなかった。また、アイダーン王の息子としてのガルトナイトは Cenél nGabraín 家系の野望を満たすために系図に書き加えられた捏造人物と考えられている。よって、ここでは、ダル・リアダ王国のガルトナイトは存在していなかったと想定されている。

<sup>14</sup> nepos は孫あるいは甥あるいは息子を意味するとの解釈がある。多分、甥 (nephew) を意味していると解釈する。この Uerb (あるいは Ibr, Yrb) は女性の名であろう。父の場合には、Uuirp (あるいは Erp, Erip, Ibp, Yrp) が使用されると考えられる。

fer n-Alba』(The History of the men of Scotland) には、ガブラーンの息子アイダーンの息子ガルトナイト(Gartnait)が子カヌー(Cano あるいは Canu)を生んだとある<sup>15</sup>。もし『Annals of Ulster』に記されたカヌーの息子ネフタンがアイダーンの息子ガルトナイトの息子カヌーの子 Nechtan であれば、Nechtán son of Canu はガルトナイトの孫であり、ダル・リアダ王ガブラーンの曾孫になる。もしガルトナイトの息子カヌーの子 Nechtan がピクト王ネフタンであれば、ピクト王国は、多分、ダル・リアダ王国の支配下にあった、あるいは、ダル・リアダ王国に従属していたと考えられる<sup>16</sup>。

アバーネシー (Arbenethy) 修道院の設立者については『Pictish Chronicle』に記録され、偉大な Nechtan (Nechtán Morbet) が聖ブリジッド (Saint Brigid) (453年生-524年没) にアバーネシーを与えたとある。この偉大なネフタンとは、ネフタン1世 (Nechtán Morbet) (在位期間不明：5世紀) であると判断される。

## 1.2 ノーザンブリア王国との連携と対立：タロルガン1世とブリイディ3世

### 1.2.1 タロルガン1世とその事績

次の王は、キニオフ (Cinloch) (在位 617年-631年あるいは 633年) であった。彼の死は、『Annals of Ulster』、『Annals of Tigernach』、ならびに『Chronicon Scotorum』に報告されている。『Pictish Chronicle』によると、王位はガルトナイト3世 (Gartnait III あるいは Gartnait son of Foith あるいは Gartnait son of Uuid) (在位 633年-637年) に継承された。次の王は、ブリイディ2世 (Bridei II あるいは Brudei son of Foith あるいは Bridei son of Uuid) (在位 637年-642年) とタロック3世 (Taloc III あるいは Taloc son of Foith あるいは Taloc son of Uuid) (在位 642年-653年) であった。この2人は兄弟で、2人の死は『Annals of Ulster』や『Annals of Tigernach』に報告されていた。

そして、タロルガン1世 (Talorgan I あるいは Talorcan I) (在位 653年-657年) が王位を継承した。タロルガン1世は、ノーザンブリア王国のオズワルド (Oswald) (在位 634年-642年) およびオズウィ (Oswiu あるいは Oswy) (在位 642年-670年) の甥であった。彼の父親は、バルニシア王国のオズワルドおよびオズウィと兄弟のエンフリス (Eanfrith) であった。

<sup>15</sup> しかし、この説は疑わしく、ダル・リアダ王国側の捏造であろうと考えられている。

<sup>16</sup> 先に示したように、Uerb は女性の名であるから、アルト・カルト王国のネスオンとダル・リアダ王国のガルトナイトの息子カヌーの子 Nechtan とが同一人物であっても矛盾はしないが、しかし、『Senchus fer n-Alba』の記述は疑わしい。アイダーン王の息子の中には、ガルトナイトがいたというこの資料は、Cenel nGabrain 王家の捏造の可能性がある。ガブラーンの息子アイダーンの息子ガルトナイトが存在したかどうかは不明である。よって、その息子カヌー (Cano あるいは Canu) の子 Nechtan がアルト・カルト王国のネスオン王 (Neithon) であるという考えも疑わしくなる。

彼らは、アシルフリス (Æthelfrith) (在位 593 年-616 年) 王の息子であった。アシルフリス王が殺害された後、アシルフリス王の 3 人の息子の長兄エンフリスはピクト王国、次兄オズワルド (Oswald) はダル・リアダ王国、および末っ子のオズウィはダル・リアダ王国あるいはアイルランドにあったピクトに関係する国にそれぞれ逃走したと見られる。

タロルガン王は、ノーザンブリア王であった叔父のオズウィ王と連携し、周辺国の一つのダル・リアダ王国と対峙した。彼が王位に就いた翌年の 654 年に、タロルガン王はダル・リアダ王国のコネフの息子ドゥンハズ (Dúnchad mac Conaing) (在位 650 年-654 年) をストラサアーンの戦いで敗北させ、殺害した。彼は、ノーザンブリア王国のオズウィ王に臣従した、あるいは、従属したと思われる。このとき、ノーザンブリア王国はイングランドで最も勢力の強い王国であった。

ピクト王国の次の王は、ガルトナイト 4 世 (Gartnait IV あるいは Gartnait mac Domnaill) (在位 657 年-663 年) であった。彼の死は、『Annals of Ulster』ならびに『Annals of Tigernach』に報告されているが、これ以外のことは知られていない。

### 1.2.2 ズレスト 6 世とノーザンブリア王エクフリスとの戦い

次の王は、ズレスト 6 世 (Drest VI<sup>17</sup> あるいは Drest mac Domnaill) (在位 662 年?-671 年) で、ガルトナイト 3 世と兄弟で、『Annals of Ulster』ならびに『Annals of Tigernach』には 671 年にピクト王を退位したことが報告されている。ノーザンブリア王国との 2 つの川の戦い<sup>18</sup> でズレスト 6 世は敗北した。この戦いについては、8 世紀に活躍した修道士ステファン (Stephen of Ripon) (生没不明) の『Vita Sancti Wilfrithi』<sup>19</sup> から知ることができる。それによると、その戦いは 671 年に起こっている。ノーザンブリア王エクフリス (Ecgrith) (在位 670 年-685 年) 王は、ピクト国 (Pictland あるいは Fortriu) による彼の宗主権破棄の計画を知り、慌てて騎兵を集め、北に向かい、ロージアン (北ベルニシアを治めていたと思われる) の彼に従属するビオンハス王 (Beornhæth) (在位 671 年-685 年) の支援を得て、ピクト王のズレスト 6 世 (Drest IV ; Drest mac Domnaill) (677 年没) と戦い、ピクト国を敗北させた。戦闘場所は、不明であるが、歴史家によると、パースの近くで、モンクレイ

<sup>17</sup> ズレスト 6 世の前に、ピクトの列王記では、既にズレスト 1 世からズレスト 5 世が存在していた。何れのズレスト王の在位期間も不明であるが、ズレスト 1 世は 5 世紀の王である、他の何れもブリディ 1 世の前の時代の王である。

<sup>18</sup> この戦争は、ノーザンブリアの宗主権あるいはその覇権の凋落を阻止するためのエクフリス王の挑戦であったと考えられる。

<sup>19</sup> この書物は、聖書の人物と使徒パウロとウィルフリスの比較をし、ウィルフリスの聖性や善良さを記述したものであったが、彼の生涯を歴史的に記述していた。

フ島 (Moncreiffe Island, あるいは Friarton Island)<sup>20</sup> の近くである。修道士ステファンは、負傷したピクト兵で2つの川を埋め尽くされるほどであったと記述し、また、ノーザンブリリアの騎兵の活躍を誇らしげに記述している。この戦いに敗れたピクト王国のズレスト王は退位し、ブリィディ3世 (あるいはブルート3世) (Bridei III あるいは Bridei mac Bili) (在位 671-693年) がピクト王 (Fortriu 王) になった。

### 1.2.3 ブリィディ3世と領土拡張：685年のダンニヘンの戦い

ブリィディ3世は、アルト・カルト王国のベリー1世 (在位7世紀初めから中頃) の息子であった。彼の死は、『Annals of Ulster』ならびに『Annals of Tigernach』に報告されている。『Harleian Genealogies』によると、ベリー1世はネスオン (Neithon) の息子であった。このネスオン王がピクト王国の Nechtan nepos Uerb と同一人物であるならば、ブリィディ3世は彼の祖父のネフタン (Nechtán nepos Uerb) を通じてピクト王国の王位を継承したと考えられる。聖アダムナンの『聖コロンバの生涯』では、ベリー1世がピクト王ブリィディ3世 (Bridei III) (在位671年-693年) の父親であると報告され、『Historia Brittonum』では、ブリィディ3世はノーザンブリリア王国のエクプリス王と従兄弟である<sup>21</sup> と記されている。

ブリィディ3世は、領土拡張のために大いに活発な行動を行った。680年あるいは681年には、南ピクトのダンノッター (Dunnottar) 城<sup>22</sup> を攻撃し、682年には、従属国であったと思われるオークニ諸島と戦闘し、それを破壊し、683年には、アルト・カルト王国のストラスアーンのダンダーン (Dundurn)<sup>23</sup> を攻撃した。この時期は、ノーザンブリリアによる宗教改革の時期と重なる。ウィトビーの宗教会議 (664年) で、ノーザンブリリア王国ではローマ・カトリックへの信仰を誓い、ノーザンブリリアの司教管区が分割され、多くの司教管区が創設された。その一つが西ロージアンのピクト司教 Twumwine のアベコーン (Abecorn) 司教管区であった。また、キリスト教の復活祭の日付論争では、正式にノーザンブリリア王国でもローマ・カトリックの考えが取り入れられた。それまではノーザンブリリアのベルニシアでは聖コロンバ

<sup>20</sup> モンクレイフ島は、パースを流れるテイ川を2つの水路 (海峡) にする。

<sup>21</sup> ベリーの妻がノーザンブリリア王国の貴族 (デイラ王国エドウィンの娘) であったのかも知れない。

<sup>22</sup> この城は、スコットランドの北東海岸にある岩の岬に位置する中世の破壊された砦であった。ダンノッター (Dunnottar) は、Stonehaven の南に位置している。

<sup>23</sup> ここは、狭いが、岩が多く、険しい丸い小山である。この丸い小山の頂上の直径はおよそ21メートルで、その小山の広さは290メートル掛ける160メートルであった。ここに砦が設けられ、その砦は、その丘の側面全体に渡る、中庭 (Courtyards) と防御施設の壁からなっていた。1976年のグラスゴー大学の調査では、その斜面に幅4メートルの壁の跡があり、それは、瓦礫と木材でレースされていた。その跡から、砦の大きさは20メートル掛ける15メートルの広さで、それは4メートルの厚さの木材でレースされた瓦礫の壁で囲まれていた。

のアイオナの伝統に従っていたと思われる。一方、ピクト王国のブリィディ 3 世は、アイオナの伝統のもとにあり、ノーザンブリアが支持するローマ・カトリック教会のピクト王国への侵入・浸食を嫌い、また、彼はマリー王国を中心とする、ピクト王国の上王になり、その土地を南（南ピクトの治める地域）に拡げようとした。これは、ブリィディ 3 世の独立を意味し、彼を従属王と見ていたエクフリス王との関係を断ち切る活動であった。そのために、685 年にエクフリス王によってダンニヘン (Dunnichen) の戦いが引き起こされた。この戦いでブリィディ 3 世<sup>24</sup> は、ノーザンブリアの軍に壊滅的な打撃を与え、エクフリス王とその軍を敗北させた。これによってピクト王国はノーザンブリアからの独立を確実にした。また、この敗北によってノーザンブリア王国の北における勢力は弱められ、ノーザンブリア王国は、ピクト国の南部（ロージャン）から追い出された。その後、そのノーザンブリア王国が治めていた領地ロージャンは、ピクト人のマリー王国（あるいは Fortriu 王国）によって支配されたと推測される。

### 1.3 ブリィディ 4 世とネフタン 4 世兄弟とピクト王国の独立

#### 1.3.1 ブリィディ 4 世とビルの宗教会議

次の王は、タラン (Taran あるいは Taran son of Ainftech) (在位 692 年-696 年) であった。彼とブリィディ 4 世 (Bridei IV あるいは Bridei mac Der-Ilei) (在位 697 年?-706 年) は異父兄弟であったと思われる。『Annals of Ulster』には、698 年に“Tarachin went to Ireland”とある。タランは、ブリィディ 3 世の娘 (デル・イレイ : Der-Ilei) の子であったと思われる。

次の王のブリィディ 4 世は、タラン王とは異父兄弟<sup>25</sup> で、彼の母親もブリィディ 3 世の娘(あ

<sup>24</sup> 『Historia Brittonum』によると、エクフリス (Ecgrifhth) 王とピクト王 (上王 overking) であったブリィディは、母方の従兄弟であった。ブリィディの母はエドウィン王の娘であり、またエクフリスの母はエドウィン王の娘エアンフレド (Eanfloed) であった。ピクト王ブリィディはアルト・カルト王国の王ベリー (Beli) の息子であった。彼には、ピクト王国のみならず、アルト・カルト王国およびノーザンブリア王国にも王位の継承を申し出るチャンスがあった。実際、ブリィディ王は、果敢な王であり、680 年あるいは 681 年に南ピクトのダンノッター (Dunottar), 681 あるいは 682 年にはオークニ島、および 683 年にはストラスアーンの Dundurn を攻撃する動きは、宗主国 (ノーザンブリア) にとっては脅威であった。その結果が、ノーザンブリアのエクフリス王による宗主権誇示のためのピクト国侵攻となり、685 年のダンニヘン (Dunnichen) の戦い (あるいは Dun Nechtain あるいは Nechtansmere の戦い) となった。しかし、この戦いはエクフリスなどのアングロ・サクソン軍の殲滅的な敗北に終わった。エクフリスはその戦いで殺害された。

この戦闘場所は不明である。ベードも具体的な地名を上げていない。“the straits of inaccessible mountais”とあるのみである。従来、その場所として、ファイフ湾の北側のピクト国の Forfar 近くの Dunnichen Moss であろうと考えられてきた。しかし、最近、新説が提示された。それによると、その場所は、ハイランド地方のバドノッホ (Badenoch) の Loch Insh の北西岸にあるダンアフトン (Dunachton) であろうという説である。この地名は、Dun Neachdain (ネフタンの砦) を意味し、そこは、1870 年にピクト石 (Pictish Stone) が発見された所である。

<sup>25</sup> 彼の異父兄弟には、Talorgan (Talocan) son of Drest, Ciniod son of Der-Ilei などがいる。

るいは妹) デル・イレイ (Der-Ilei) であった。ダル・リアダ王国のゲネル・コムゲル (Cenél Comgaill) 家系のフィンギンの息子ダルガルト (Dargart mac Finguine) (685年没) が彼の父親であり、彼とデル・イレイが結婚し、ピクト王国の2人の王子ブリィディ (Bridei) とネフタン (Nechtan) が生まれた。ダルガルトの死は、『Annals of Ulster』ならびに『Annals of Tigernach』に報告されている。彼の死亡年は、ダンニヘンの戦いの起った685年である。彼は、多分、この戦いで活躍したダル・リアダ王国の係累であったと思われる。ゲネル・コムゲル (Cenél Comgaill) 家系の人物がアイルランド資料で報告されるのは希であった。彼の死が報告されているということは、この家系がピクト人と連携して勢力を拡大したことを意味するのであろうか。また、ブリィディ4世は、ノーザンブリア王国のアルズフリス国王と戦った。697年あるいは698年にベルフトレッド (Berhtred)<sup>26</sup> (698年没) が死亡した戦闘がノーザンブリア王国との間にあったとアイルランド資料には報告されている。その戦闘の場所などは不明である。

彼の治世で特記すべきことは、Cáin Adomnáin (Law of Innocents) をブリィディ4世が保証した王の一人であったことである。これは、697年のビル (Birr)<sup>27</sup> の宗教会議<sup>28</sup> で決められた。そのルールは、戦争や戦闘に参加しない人の安全と免除を保証する一連のルールであった。これは、子供、聖職者、聖職者の地にいる農民の殺害、あるいはレイブや高貴な婦人の純潔に対する非難に対して、制裁を加え、そして女性が戦争に参加することを禁止した。これによって聖アダムナンは、キリスト者の間での戦争の蛮行を軽減することを第1に目指した。

<sup>26</sup> 彼は、ノーザンブリア王国のエクフリス国王の時代にアイルランドのゲルガ平原を略奪し、そこの教会を破壊し、人質を取った。その動機は不明である。ノーザンブリア王国のアルズフリス国王は、684年のエクフリス国王の時代に遠征で連れて戻ってきたアイルランド捕虜 (人質) の解放の件で聖アダムナンに2度会い、そして、その捕虜を解放した。

<sup>27</sup> ビル (Birr) は、アイルランドを南北に二分する地である。北は Leath Cuinn, 南は Leath Moga と呼ばれた。北は、コナハト (Connacht), ウルスター, およびミーズ (Meath) を取り込み、南はマンスター, オスリゲ (Osraige), およびレインスターを取り込んでいた。

<sup>28</sup> Birr の宗教会議は、697年にアイルランドの Offaly 州の Birr でアイオナ司教の聖アダムナンと彼の血族のアイルランド上王ロイングゼフ (Loingsech mac Óenngasso) によって召集された。この会議では、戦争や戦闘に参加しない女性や聖職者などの保護をもたらすアダムナンのルールが決められた。これは、教会と世俗貴族の会合であった。その参加者には、アイオナの聖アダムナンと司教 Coeddi, アーマーの司教であり、かつ、聖パトリックの精神的後継者であった Flenn Febla, エムリー (Emly) の司教, 他の司教や大修道院長, および聖パトリックの生涯の作者であった Muirchu moccu Machtheni などの知識人であった。

### 1.3.2 ネフタン4世と内戦

次の王は、デル・イレイの息子ネフタン(Nechtan mac of Der-Ilei あるいは Nechtan IV)<sup>29</sup> (686年生-732年没) (在位 706-724年および 729年-732年)であった。彼はブリイディ4世と兄弟であった。彼の治世は平和であった。彼の治世で最も注目すべきことは宗教改革(教会改革)であった。彼は、ノーザンブリアの復活祭の日取りを受入、アイオナの伝統を踏襲している修道士を除名した<sup>30</sup>。この改革は、モンクウェアマウス(Monkwearmouth)<sup>31</sup>およびジャロー(Jarrow)<sup>32</sup>の大修道院長ケオルフリッド(Saint Ceolfrid)<sup>33</sup> (642年生?-716年没)がネフタン王を説得し、ネフタン王がその大修道院長の見解を受け入れたことを可能にした。ケオルフリッドは復活祭に関する論争の内容をネフタン王に示すと同時に、彼は、ネフタン王に石づくりの教会を建てるための技師と石工を派遣した。ネフタン王は、710年頃に、Black Isle半島の南よりの海岸にあるローズマーキー(Rosemarkie)、マリーにあるダフス(Duffus)およびレステンネス(Restenneth)<sup>34</sup>のペテロ教会の創建を行ったと思われる。

<sup>29</sup> Nechtan mac Der-Ilei と『Annals of Ulster』で報告されている Nechtan Mac of Dargart は同一人物であると思われる。

<sup>30</sup> しかし、除名された修道士が復活祭の日取りや剃髪に関してアイオナの伝統に従っていたという証拠はない。

<sup>31</sup> この修道院は、ノーザンブリア王エクフリス(Echfrith) (在位 670年-685年)から土地を与えられたベネディクト・ビスコップ(Benedict Biscop) (628年生-690年没)によって8年の年月を費やして建てられた。ビスコップは、682年に、彼の従兄弟のイースターウィン(Easterwine) (650年生-686年没)をその大修道院長および補佐として任命した。イースターウィンは、若いときには、エクフリス王の軍隊に所属する軍人であったが、25歳の時軍人になることを断念し、修道士になった。

<sup>32</sup> モンクウェアマウス修道院の創建後にビスコップは、エクフリス王から別の土地を与えられ、彼はジャロー修道院を創建した。イースターウィンの死亡後、モンクウェアマウス修道院とジャロー修道院の大修道院長に、ケオルフリッドが任命された。この修道院は後にチューダ王朝のヘンリー8世(Henry VIII) (在位 1509年-1547年)によって解体された。その廃墟(残骸)の敷地に聖ポール教会が建てられている。ジャローは、イングランドのタイン・ウエアー州(以前にはダラム州)にある人口2万7千人ほどの町で、タイン川沿いに位置している。

<sup>33</sup> 大修道院長ケオルフリッドは、ベーダの監督者であった。ベーダは、ケオルフリッドが死ぬ716年まで彼の忠実な生徒であった。彼は、27歳の時に司教に任命された。

<sup>34</sup> レステンネス小修道院(Restenneth Priory)は、アングス州のフォファー(Forfar)から1.5マイル東に位置していたが、破壊されたている。715年にネフタン王はケオルフリッド大修道院長に石づくりの教会を建設するための職人を要求し、その代わり建立された教会を聖ペテロに捧げることを約束した。この最初の石づくりの教会は、後に建てられた小修道院の敷地に建てられたと考えられる。この説に反対する人もいる。

その建立後、歴史的にレステンネスが現れたのは1100年代のデイヴィッド1世(David I) (在位 1124年-1153年)の治世であった。デイヴィッド王は、王室の不動産(土地)をレステンネスに寄附し、その教会は礼拝のできる内陣を備えたと思われる。また、マルコム4世(Malcolm IV) (在位 1153年-1165年)はその教会をアウグスティヌス修道会の管理下に置いた。このころNave(身廊)が追加され、修道会が教区教会になったと思われる。1200年代にもその教会は拡張され、その教会にはロバート・ブルース(Robert de Bruce) (在位)の子供が埋葬された。1560年代の宗教改革後、レステンネスとその保有地はHome(Lord Home)一族に与えられた。

このネフタン王をアバーネシー (Abernethy) 修道院の創建に結びつける説があるが、既に説明したように、実際のその創建者は、5世紀のネフタン1世 (Nechtan Morbet) であると判断される。

宗教の面で、デル・イレイの甥のネフタン王は、ノーザンブリア王国の復活祭などの宗教儀式を取り入れることによって、ピクト王国とノーザンブリア王国の結びつきを強めた。アイオナの修道士の追放は、ピクト王国がノーザンブリアおよびローマに従うのではなく、ピクト王国の教会の独立に導くものであったと考えられる。

彼の2人の息子が710年に死亡し、彼は、『Annals of Tigernach』によると、724年に修道院に入り、王位を甥<sup>35</sup>のズレスト7世 (Drest VII)<sup>36</sup> (在位724年-726年あるいは729年) に譲位した。しかし、このズレスト王の支配は挑戦を受けた。725年に、彼の息子 Simul が監禁され、ネフタン王によって任命されたフォトリウの司教 Brec が死亡した。726年にズレスト7世は、ネフタンを彼の党派の人が管理する修道院に移し、監禁した。その後、『Pictish Chronicle』には、ズレストはアルピン1世 (Alpin I あるいは Ælfiwine I)<sup>37</sup> (在位726年-728年?) と共同統治したと報告されているが、しかし、『Annals of Tigernach』にはズレストと共同したアルピンの名はなく、726年にネフタンが王位から投げ出され、彼に代わってアルピンがその王国を治めたと報告されている。多分、ズレストはアルピンに取って代わられたのでないかと推測される。アルピンは、タロルガン1世の父親エンフリス (Eanfrith) と同様にノーザンブリア王国 (バルニシア王国) からの逃亡者あるいはその係累であったと思われる。

728年から729年には、ピクト王国での内戦が報告されている。ネフタン4世、ズレスト7世、アルピン1世<sup>38</sup> およびオエンガス1世による王位継承を巡る内戦が繰り広げられた。ネフ

<sup>35</sup> しかし、このズレストがネフタンの甥であるという証拠はない。710年に彼の息子が死んでいるので、息子ではないと判断できる。ネフタンの子ではないとしても、ネフタンの異父兄弟あるいは従兄弟であると推測することもできる。

<sup>36</sup> 『Annals of Ulster』も『Annals of Tigernach』もズレストの父の名を報告していない。ある説では、彼の父を Talorgan son of Drest としている。しかし、このズレストは、ネフタンの異父兄弟の息子で、ネフタン王の甥である。

<sup>37</sup> Alpin は Ælfiwine の古い英語のピクト形式である。このアルピンはピクトの外から (ノーザンブリア王国から) の逃亡者であったのかも知れない。

<sup>38</sup> このアルピンと、『Annals of Ulster』に報告されている “Elffin son of Crup” とはどのような関係にあるのであろうか。このアルピンが742年に包囲されたとある。また、730年にダル・リアダ王国を治めた Alpin mac Echdach と彼の関係は不明である。『Chronicle of Merlose』や『Poppleton Manuscript』に報告されている Alpin mac Echdach は、アイルランド資料には見あたらない。また、このアルピンがケニス1世の父マック・アルピンであるならば、ダル・リアダ王国がピクト王国に移転した、あるいは、引き継がれたと解釈することもできる。これもよく分からない。『Pictish Chronicle』の王の列にこのアルピン (Alpin mac Echdach) は報告されていない。さらに、『Pictish Chronicle』には、Alpin son of Feret という王が報告されている。

タンとオエンガスが連携し、ズレスト7世とアルピンと戦った。アルピンは、Monaidh Craeb (Cairn o' Mount)<sup>39</sup> でオエンガスに敗北し、そのため多分国外に逃亡した。729年にネフタン4世が復位し、ズレスト7世は730年に殺害された。ネフタン王の死後、オエンガス1世 (Óengus son of Fergus) (在位732年-761年)が王位に就いた。彼は、ピクト王国の統一を成し遂げ、その勢力を拡大させた国王であった。

## 第2節 オエンガス1世によるピクト王国の統一とその展開

### 2.1 ピクト王国の内戦の統一とその周辺国

#### 2.1.1 オエンガス1世とピクト王国の統一

8世紀初めのピクト王国の内戦で勝利し、ピクト王国を強力な王国に導いたオエンガス1世について考察する。彼は、王国内の内戦を治め、その周辺国にその勢力を拡大する戦闘を展開した。

オエンガス1世の先祖は、アイルランドのマンスター王国のオーワナフト (Eóganachta)<sup>40</sup> 家系に繋がる一人であったとされている。彼の出自は、Eoghachta Magh Geirginn であると言われているが、それは、スコットランドのアンガス (Angus) およびミアーン (Mearns) 地域に関連するキルキン (シルシン) の種族であろうと推測される。彼の若い頃のことは知られていなく、彼が歴史上に顔を出したのは、彼の中年過ぎであった。彼には、Talorgan (750年没) と Bridei (Bridei IV: 在位761年-763年) (763年没) の兄弟がいた。

オエンガス1世は、ピクト国内の内戦に勝利し、国内を統一した。ネフタン王が724年に修道院に入るために退位したが、彼は726年にズレスト7世に他の修道院に監禁された。728年と729年の間、4人が覇権争いを行った。それは、オエンガス1世、ズレスト7世、ネフタン4世ならびにアルピン1世の4人であった。オエンガスとネフタンが同派であり、アルピンとズレストが他の派あるいは2人は敵対していたかもしれない。729年にオエンガスと彼の敵対者達が Monaidh Craeb (Cairn o' Mount) で戦い、オエンガス派が勝利し、アルピン1世は敗北した。このオエンガスの勝利によって、ネフタン4世は、国王に復位し、彼の死の732年までその地位にあった。オエンガス王は、729年にズレスト7世を Druimm Derg Blathuung<sup>41</sup> の戦いで敗北させ、彼を殺害した。これによって、オエンガスは内戦を制圧した。

<sup>39</sup> Cairn o' Mount は、アバディーンシャーにある山 (今日のグランピア山) の峠道である。この山の高さは、454メートルで、そこから北海 (North Sea) まで見通せる。

<sup>40</sup> オエンガスは、神話的には、ゴイルプア・ルアハラ・クイルク (Coirpre Luachra mac Cuire; 別名 Coirpre Cruithnchán) (5世紀中頃) の子孫とされる。彼は、ピクト王 feredachm の娘 Mongfind の息子ゴナル・コルク (Conall Corec) であった。ゴイルプアは、ゴナル・コルクがスコットランド逃亡し、その逗留中に、宿されたと推測される。

<sup>41</sup> この場所は不明である。現在の Drumderg かも知れない。

その後、オエンガスはピクト王国の勢力を周辺国に拡大するための戦いをおこなった。この頃のピクト王国の周辺国とは、ノーザンブリア王国、ダル・リアダ王国およびアルト・カルト王国であった。この頃のピクト王国の領域は、フォース川から北と、オークニ、シェトランドおよびヘブリーズの島々（島嶼部）であった。ピクトの権力は、マリー地方に基盤を持つフォトリウ王国であったと考えられる。この王国は司教座をローズマーキーに置いていた。

### 2.1.2 オエンガス1世と周辺諸国の戦い

周辺国の実状の概観とオエンガス王の戦いについて見てみよう。最初に、ノーザンブリア王国を取りあげよう。この王国は、7世紀の後半まで、北部イングランドで最も勢力のあった王国であった。アルズフリス王(AldfrithあるいはAldfrid) (在位685年-704あるいは705年)のときには、ノーザンブリア王国は最盛期の領土面積には達していなかったが、文化面では最盛期を迎えた。次の王は、エルズウルフ(EardwulfあるいはEadwulf) (在位704年-705年)で、彼は王位篡奪者でイダ王の家系に繋がるかどうか分からない王であった。アルズフリス王の息子オズレッド1世(Osred I) (在位705年-716年)は暗殺され、イダ王の息子Ocgの家系で最初にノーザンブリア王になったコエンレッド(Coenred) (在位716年-718年)がオズレッド王を暗殺したかも知れない王であった。オズレッド1世の兄弟であったオズリック(Osric) (在位716年-729年)は狂死した。オエンガス国王と同時代のノーザンブリア王国の国王はエズバート(Eadberht) (在位737あるいは738年-758年)とオズウルフ(Oswulf) (在位758年-759年)であった。エズバート王は、有能な王であり、近隣の諸王国との関係ではノーザンブリア王国の支配権の再生に努力し、そのために740年にオエンガス1世と戦った<sup>42</sup>。ピクトとノーザンブリアが争う間に、マーシャ王国のアシルバルド王(Æthelbald)<sup>43</sup>(在位716年-757年)はヨークを焼き、彼の土地を取り戻した。その後は、彼はオエンガス1世と同盟を結び、ストラスクライドを侵略したが、彼とオエンガス1世の軍は、マーシャ王国のアシルバルド王に敗北したと思われる。エズバートは、757年に退位し、ヨーク大聖堂付の

<sup>42</sup> この戦争の原因はよく分からない。一説では、エルズウルフ王(EardwulfあるいはEadwulf) (在位704年-705年)の息子エルウィン(Earwine)をアルズフリス王が殺害したことによる。エルズウルフ王はかつてピクトあるいはダル・リアダに逃亡していた。オエンガス王はそのエルウィンにノーザンブリア王にすることを画策していたのかも知れない。そのために彼を殺害したアルズフリス王と戦ったのではないであろうか。

<sup>43</sup> 彼の統治の間に、マーシャ王国のペング王(Pedan)<sup>43</sup> (在位期間不明; 655年没)やウルフヘレ王(Wulfhere) (在位658年-675年)の勢力を回復した。ウェセック王国のイネ王(King Ine) (在位688年-726年)が726年にローマ巡礼のために退位し、ケント王国のウィトレッド王(King Wihtrred) (在位670年?-725年)が725年に死亡すると、アシルバルド王がハンバー川以南で最も有力な王になった。彼のウェセック王国やケント王国に与えた影響については『Anglo-Saxon Chronicle』から得られる。

修道院に入った。

彼が修道院に入った後、ノーザンブリア王国の王は、オズウルフで、その在位期間は1年であった。彼は召使であるいは身辺警護者に暗殺された。彼の兄弟のオズウィン (Oswine) は、次のアシルワルド王 (King Æthelwald Moll) (在位 759 年-765 年) に暗殺された。また、アシルワルドは、オズウルフ王の暗殺にも関与し、ノーザンブリア王家の関係者であったかどうかは不明である。実際、彼は、ノーザンブリア王の系図には入れられてはいなく、ベルニシア王家の系統ではないであろう。また、彼がデイラ王国のアル (Ælle) の子孫であるかどうかは分からない。基本的には、ノーザンブリア王国の王家の家系 (イダの家系あるいはアルの家系) は、8 世紀中頃には途絶えていたと判断できる。ノーザンブリアは、次第に無政府状態になり、9 世紀および 10 世紀のヴァイキングに侵攻・襲撃され、ヴァイキングに支配され、基本的にはヴァイキングの支配する王国の一つになった。

次に、ダル・リアダ王国の実状とこの国とオエンガス王の間の戦いを取りあげよう。この王国は、ピクト王国の南と西に位置していた国であった。この王国では、上王の王位を巡って、北東のアーガイルに拠点を置くゲネル・ローン家の系列と、キンタイヤに拠点を持つゲネル・ガブラーン家の系列が争っていた。フィアンナヴァル・ウア・ドゥンハド (Fiannamail ua Dúnchado) (在位 698 年-700 年) の後継者であったフェルハイルの息子シェルバハ (Selbach mac Ferchair) (在位 700 年-723 年) によって、ダル・リアダ王国内の 20 年に及ぶ王位継承を巡る内戦が收拾させられた。彼は、フェルハル・フォタ (Ferchar Fota) (在位 697 年) の息子で、ケネル・ローンの家系に属していた。723 年に彼は、王位を譲り、修道院に退いた。その王位は息子のシュルバグの息子ドゥンガル (Dúngall mac Selbaig) (在位 723 年-726 年) に引き継がれた。彼は、直ぐにケネル・ガブラーン家に権力を奪われ、726 年以降には、ダル・リアダ王国の上王ではなく、ただケネル・ローン領土地の王 (Lord) であった。彼は、731 年にオエンガスの息子ブリディに指揮されたピクト王国と、コンガザの息子タルルガン (Talorgan mac Congassa) に指揮されたダル・リアダ王国と戦い、また、同 731 年に、ドゥンガルは、ケネル・ガブラーンの地にあったロツホ・フィンの Tarbert<sup>44</sup> を焼き、733 年にはピクト王国

<sup>44</sup> これは、東ターバート湖およびフィン湖の周囲に設けられ、キンタイヤ半島とクナップデール (Knapdale) と西ターバート湖を結びつけている。この地は、港およびキンタイヤと内ヘブリーズに近づく戦略地点として歴史的に重要な地であった。過去には、この地はダル・リアダの領地であった。この地は、東西のターバート湖の物資の輸送には欠くことのできない地であった。一方の湖で荷揚げされた物資を地峡を通じて輸送し、他方の湖で荷が下ろされた。そして、そこから他の所に船輸送された。これによって、船乗りにもマル島を回って物資を輸送することを回避させた。

この地は 13 世紀に要塞にされ、島嶼部の王 (Lord of Isles) に対するために、1320 年代にロバート・ドゥ・ブルース (Robert de Bruce) (1274 年生?-1329 年没) によって外壁とタワーが加えられ、増強された。

のオエンガスの息子ブリィディを強制的に退去させたときに、神の名をけなしトーリー島(Tory Island)を冒瀆した<sup>45</sup>。彼は、ケネル・ローンのアーガイル王の王位も剝奪され、その王にはアンブケラフの息子マイルダハ(Muiredach mac Ainbcellach)(在位733年-736年)が就いた。タロルガンは、ピクトに差し出され、溺死させられた。また、ドロスタンの息子タロルガン(Talorgan mac Drostan)は、734年に捕らえられ、739年にオエンガス王の命令によって溺死させられた。

726年にエハダハの息子エオハズ(Eochaid mac Ehdach)(在位726年-733年)は、シュルバグの息子ドゥンガルを廃位し、王位を奪った。彼は、ドマングルトの息子エオハズ(Eochaid mac Domangairt)(在位697年)の息子で、ケネル・ガブラーンの家系に属した。彼は、アイルランドの北部イーニエル(Ui Néill)の系列のケネル・ゴナル(Cenél Conaill)家系のローンジフの息子フレセベルタフ(Flaithbertach mac Loinsech)(上王在位728年-734年)と北部イーニエルのゲネル・ネーガン(Cenél nEógain)の家系のアエダ・アラン(A'ed Allán)(在位734年-743年)の間で上王を巡って覇権争いを展開させた。734年にフレセベルタフがアエダにMag nÍthaの戦いで敗北したため、彼はダル・リアダ王国に助けを求め、ダル・リアダ王国はNaval艦隊を派遣した。しかし、ダル・リアダの艦隊は、北アイルランド最大の河川Bannの河口で破壊され、敗北した<sup>46</sup>。この派遣を決めたのがエオハズ王であったと言われている。この派遣による損失がダル・リアダ王国にとって、どれ程の打撃であったかは不明であるが、しかし、ケネル・ガブラーン家にとっては大きな打撃であった。

その後王位に就いたアンベクルラハの息子マイルダハ(Muiredach mac Ainbcellach)(ダル・リアダ王在位733年-736年)はフェルハルの息子エンベクルラハ(Ainbeclach mac Ferchair)(在位697年-698年)の息子で、ケネル・ローンの家系に属していた。736年にオエンガス1世の兄弟のTalorgan mac Fergusaの旗下のピクト軍にフェルハルの息子エンベクルラハは敗れ<sup>47</sup>、彼は退位した。彼の時代に、オエンガス1世の下にあったピクト人(ピクト王国)に侵攻され、ダル・リアダ王国は征服された。これ以降、ダル・リアダ王国は、基本的には、ピクト王国の配下にあったと判断しても問題ないであろう。

アルト・カルト王国(後にストラスクライド王国)の記録は少ない。オエンガス1世と同

<sup>45</sup> このことは、『Annals of Ulster』に記されている。

<sup>46</sup> オエンガス1世もゲネル・ネーガン(Cenél nEógain)の家系のアエダ・アランと戦ったと思われる。彼は、マンスター王Cathal mac Finguine(742年没)と連帯してアエダ・アランと戦ったかも知れない。『Fragmentary annals of Ireland』には、フレセベルタフ・マック・ローンジフ(Flaithbertach mac Loinsech)を支援するフォトリウ(Fortriu)からのピクト艦隊があったことが報告されている。

<sup>47</sup> この戦いについては『Annals of Ulster』に記録されている。

時代のアルト・カルト王は、チュエズブル王 (King Tuedebur)<sup>48</sup> (在位 722 年? -752 年)<sup>49</sup> である。750 年にアルト・カルト王国が、『Annals of Cambriae』によると、ヴァンドック (Mocetauc; 今日の Mugdock)<sup>50</sup> において、ピクト王オエンガス 1 世の兄弟タルルガン (Talorgen) とノーザンブリアの連合軍に勝利した。アルト・カルト王国のカイル (Kyle Aryshire)<sup>51</sup> がノーザンブリア王国の王エズバート (Eadberht) (在位 737 あるいは 738 年-758 年) に奪われた。次のアルト・カルト王ロトリ (Rotri) (在位 752 年-754 年?) は、ウェールズ王の系図およびアイルランドの年代記には記録されていない。『Annals of Cambriae』には、彼が 754 年に死亡したと記録されている。次の王は、ドゥムナグゥアル 3 世 (Dumnagual III)<sup>52</sup> (在位? 754 年-760 年)<sup>53</sup> であった。彼は、Symeon of Durham である『Historia Regum Anglorum』によると、756 年 8 月 1 日に、ピクトのオエンガス 1 世とノーザンブリアのエズバート王との連合王国軍に敗北した。彼は、降服し、講和条約を受け入れ、アルト・カルト王国 (ストラスクライド王国) は両国に臣従礼をした。これ以降、9 世紀半ば過ぎのヴァイキングの侵攻<sup>54</sup> を受けるまでのおよそ 100 年間、アルト・カルト王国は、ピクト王国あるいはピクトとノーザンブリア両王国の支配下にあったと推察される。

### 2.1.3 オエンガス 1 世と宗教

以下では、オエンガスの宗教面での事績を一瞥する。特に、彼とキリスト教との関係に焦点を当てる。記録を残しているのは、主に、何れかの修道院に所属する修道士であるため、宗教 (キリスト教) に関する事績が多くなり、彼の政治的・経済的事績を辿るのは難しい。

彼の宗教的事績として、聖アンドリュースの創建であろう。これは、オエンガス 1 世あるいはネフタン 4 世の時代であろうと思われる。というのは、『Annals of Ulster』にケンリングモナズ (Cennringmonaid) (後の聖アンドリュースのこと) の大修道院長 Túathalán (747 年没?) の死亡が報告されている。彼の死亡報告から 8 世紀半ばには、既に、そこに教会があっ

<sup>48</sup> 彼は、Beli (在位期間不明、722 年没) の息子であり、アルト・カルトの王ドゥムナグゥアル 3 世の父である。

<sup>49</sup> 『Annals of Tigernach』には、752 年に “Taudar mac Bile, ri Alo Cluaide” とあるので、アルト・カルト王のチュエジブルは 752 年に死亡したのであろう。

<sup>50</sup> Mocetauc は、多分、Milngavie の近く Mugdock であろう。

<sup>51</sup> 今日の南エイシャから東エイシャを横切る地域である。この地名は北部ブリテンのコール・ヘン (Cole Hen) (350 年生? -420 年没?) に因んで命名された。

<sup>52</sup> 『Symeon of Durham』には、アルト・カルト王国がピクト王オエンガス 1 世 (オーエンガス・マック・ファガシツ) およびノーザンブリア王エズバート (Eadberht) によって侵攻されたとある。そして、ブリテンのストラスクライドは降服した。このときのアルト・カルト王がドゥムナグゥアル 3 世であった。

<sup>53</sup> 『Annals of Cambriae』では、ドゥムナグゥアル 3 世の死を 760 年と報告している。

<sup>54</sup> ヴァイキングのアルト・カルト王国への侵攻は 870 年頃であった。

たことを予期させる。彼は、その初代大修道院長であったのかも知れない。聖アンドリュースの崇拝は、ノーザンブリア王国からピクトに持ち込まれたとも考えることができる。特に、聖アンドリュースに捧げられたヘクザム (Hexham) の修道院から持ち込まれたと思われる。

次に、聖アンドリュースの石棺 (St Andrews Sarcophagus) との関係を一瞥しよう。これは、オエンガス1世のために、あるいは、彼の孫あるいは甥の息子と考えられるコンスタンティン王のために造られたと思われる。この石棺は、9世紀後半からのもので、Sandstoneを使用して作成され、縦177センチメートル、横90センチメートル、高さ70センチメートルの直方体であったと考えられる。当初の石棺は、2つの側面石版と2つの端石版、4個の角石、および天版から構成されていたと考えられる。現存する石棺では、その天版が失われ、同様に、片方の側面および端の石版ならびに一つの角石は失われ、L字形をしている。現存する側面の石版には、右から左に、ライオン(獅子)の顎を砕いている人物<sup>55</sup>、跳ねるライオンを突き刺すために剣を持ち上げている馬に乗ったハンター<sup>56</sup>、徒歩で槍をもって武装し、犬を連れ狼に攻撃をしようとしているハンターが示されている。端石版には、十字架の腕の間に4枚のパネルを持つ十字架が示されている。喪失された側面石版や端石版も同様であったと推測される。

## 2.2 オエンガス1世の後継者：コンスタンティン王とオエンガス2世

### 2.2.1 コンスタンティン王とその事績

オエンガス1世の後の国王は、ブリイディ5世(Bridei V) (在位761年-763年)、キニオツズ (Ciniod)<sup>57</sup> (在位763年?-775年)、アルピン2世 (Alpín II) (在位775年-780年)、タロルガン2世 (Talorgan II) (在位780年-782年)、ズレスト8世 (Drest VIII) (在位782年-787年)、ゴナル・マック・タイズグ (Conall mac Taidg) (在位期間不明; 807年没)であった。その次の王は、ファーガスの息子のコンスタンティン (Constantín mac Fergusa) (在位789年-820年)であった。この王は、オエンガス1世の血筋で、オエンガス1世の孫あるいは甥の息子であったと考えられている。このことは、彼の家系もキルキン (シルシン) に始まり、マンスターのオーワナフトに関係している。

コンスタンティン王の時代には、アイルランド年代記でスコットランドの出来事に関する

<sup>55</sup> この人物は、旧約聖書のダヴィデ王を彫ったものであると思われるが、この王に擬えて描かれた偉大なピクト王オエンガス1世であるという説もある。この石棺がコンスタンティン王のために造られたのかどうかは、実際には不明である。

<sup>56</sup> この人物が獅子の顎を砕いているハンターと同一人物かどうか不明である。

<sup>57</sup> 彼の父親ウルダッハ (Uuredach あるいは Feradach) は、ダル・リアダ王国の王であったフェルハイルの息子シェルバツハ (Selbach mac Ferchair) (在位698年?-723年)の息子であった。

記述が少ない。というのは、アイオナおよびアップルクロス (Applecross)<sup>58</sup> に保蔵されていた年代記が喪失したためである。その年代記では、コンスタンティンについては2度しか報告されていない。この年代記の他の報告では、ヴァイキングのアイランドおよびスコットランド西海岸での活動が記録されている。コンスタンティン王に関する最初の報告は、789年に彼とタイズグの息子ゴナルとの戦いである。その戦いではコンスタンティン王が勝利した。その後、ゴナルは、キンタイヤの王になったが、そこで殺害された。彼の第2の報告は、820年のコンスタンティンの死である。

コンスタンティン王の治績についても歴史的資料から知ることは困難であるが、考古学的発見や歴史的遺物から彼の活動の一端を知り得る。キリスト教とコンスタンティン王の関係が知られている。第1に、パースの近くのダップリンの農場で発見された、800年頃の石碑ダップリン・クロス (Dupplin Cross) である。これは、Red Sandstone に彫られ、その高さが2.5メートル、その十字架の腕の幅が1メートルで、ピクトの彫刻の施された記念石碑である。その表面には、例えば、ハープを弾く人物像や狩りの情景、宗教的、兵士の隊列や騎馬隊および伝統的なピクトの動物が彫られていた。ただし、ピクトの伝統的なシンボルはそれには彫られていない。そこには、ラテン語でコンスタンティン王の名前が刻まれている。その十字架には、CUNSTANTIN FILIUS FIRCUS という名前が読み取れ、これは、コンスタンティン王 (Constantín mac Fergusa) の9世紀初めのラテン語表現である。ゲール語の名前をラテン語で表現する習慣がこの時代にあったとしたならば、ピクト人は、会話にゲール語を用いていたのかも知れない。この石碑が何のために建造されたのかは明らかではない。第2に、『Chronicon Scotorum』によると、ヴァイキングによるスコットランド略奪を避けるために、コンスタンティン王の治世下の818年に聖コロンバの遺物をアイオナからダンケルトに移送されたという説がある<sup>59</sup>。その遺物は、家型した聖遺物箱で Monymusk Reliquary<sup>60</sup>

<sup>58</sup> 地理的にアップルクロスと言われるところは、海岸線一帯を意味し、アップルクロス半島である。これは、ロス西部にある半島である。アップルクロスは、672年にアイランドのバンガー修道院からスコットランドに来た聖マイル・ルバ (Máel Ruba) (642年-722年) によって開かれた。彼は、バンガー修道院で教育を受け、30歳の時に修道士の仲間と一緒にアイランドからスコットランドに船出した。そして、彼は、そこに修道院を創建し、初代の修道院長になった。彼がブリテン島に渡りアップルクロスに修道院を開いたことは、同時代の年代記にも報告されている。マイル・ルバの修道院は、キリスト教布教の中心であり、かつ、ピクトにアイランド文化を弘める拠点にもなった。

<sup>59</sup> 他の有力な説として、ケニス1世 (Kenneth IあるいはCináed mac Ailpí) (在位843年?-858年) がその聖遺物箱をアイオナから移したという説がある。

<sup>60</sup> これは、現在、スコットランド博物館に所蔵されている。それは、12世紀にウィリアム1世 (William I) (在位1165年-1214年) の治世のとき、Arbroath修道院の大修道院長に手渡され、その聖遺物箱の管理に責任をもった。16世紀まではForglenにあった。ForglenもMonymuskもForbre族の手にあった。1712年にそれはフランシス・グラントに移り、1933年までグラント・コレクションとされ、現在は、それをスコットランド博物館で所蔵している。

と呼ばれている。これは、750年ごろアイオナ修道士によって作られ、ピクトのシンボルとゲールの芸術とアングロ・サクソンの金属細工技術の混成の特徴をもつ。これは、“The Breckenoch of St. Columba” (スコットランド軍の聖なる軍旗) で、戦争の時の聖なる支援のために使用されたと思われる。例えば、時代はスコットランド独立戦争の頃になるが、それはバンノックバーンの戦いにおいてイングランドのエドワード2世(Edward II) (在位1307年-1327年) 軍に勝利したスコットランド軍によって運ばれた。この聖遺物箱がアイオナからダンケルトに移されているためには、その前にダンケルトンが創建されている必要があった。年代記者は、815年にコンスタンティン王がダンケルト(Dunkeld)を創建したという。すなわち、既に、世俗的には重要な土地であったダンケルトに彼は教会<sup>61</sup>を創建した。この年代は確定していない。ある歴史家は、その創建をシャルルマーニ(Charlemagne)<sup>62</sup>(フランク王在位768年-814年)とレオ3世(Pope Leo III)(在位795年-816年)の死後であるという。このことから、彼がダンケルトを創建したのは820年頃であることは確かであろう。

第3に、コンスタンティン王の教会に関する政策を一瞥しよう。彼は、そのパトロンおよびアイオナの大修道院長ディアルマイト(Diarmait)(在位814-832年?)の協働者にして、教会改革者であった。ディアルマイトは、アイオナの修道士で、Céli dé改革では最も重要な一人であり、かつ、スコットランドへのその普及の支援者であった。また、コンスタンティン王は、Céli dé修道院のみならず、ノーザンブリア修道院のパトロンであった。『Annals of Ulster』では、829年にディアルマイトがコロンバの遺物をもってスコットランドに行き、831年にそれをもってアイルランドにもどり、また、849年にディアルマイトの後継者であったその大修道院長のIndrechtachは、アイルランドに戻った。

コンスタンティン王は、Céli dé(Culdee)<sup>63</sup>修道院の産物であるMartyrology of Tallaght(タラフトの殉教史)<sup>64</sup>で記念されている。『タラフトの殉教史』は、オエンガス(Óengus the

<sup>61</sup> たとえば、ダンケルト大聖堂の博物館に保存されている“Apostles’ Stone”はその時代に遡る。また、ダンケルトとは反対のティー川の南岸のLittle Dunkeldの教区教会に置かれているケルトのハンドベルも同時代からのものである。

<sup>62</sup> 彼は、800年にローマ皇帝に即位し、ローマ教皇レオ3世によって戴冠させられた。彼は、レオ3世を保護した。

<sup>63</sup> Céli dé(Culdee)は、禁欲的なキリスト教の修道士および隠遁者の社会の構成員であった。この用語は、修道士聖ヨハネ、『Annals of the Four Masters』に記録された外国からの宣教者、およびMartyrology of Tallaghtの編集者(あるいは)著者であったÓengus Céli déに関して使用された。Céli déは、信者大衆と分離され、彼らの生活は宗教に捧げられ、そしてコミュニティに居住した。彼らは、アイルランドやスコットランドでは、大聖堂あるいは共同教会に所属し、修道士的な生活をした。

<sup>64</sup> 『タラの殉教史』は、オエンガス(Óengus the Culdee)(824年没)の殉教史と密接に関連し、ダブリン近くのタラ修道院の修道士オエンガスあるいはMael Ruainによって編集された聖人と聖日のリストからなる8世紀あるいは9世紀の殉教史である。

Culdee) (824 年没) の殉教史と密接に関連し、ダブリン近くのタラフト修道院の修道者オエンガスあるいは Mael Ruain によって編集された聖人と聖日のリストからなる 8 世紀あるいは 9 世紀の殉教史である。

### 2.2.2 オエンガス 2 世とその事績

コンスタンティン王の後継者は、オエンガス 2 世 (Óengus II) (在位 820 年? -834 年) であった。彼は、コンスタンティン王と兄弟であった。よって、彼もコンスタンティンと同様に、アイルランドのマンスター王国のオーワナフト (Eóganachta)<sup>65</sup> 家系に繋がる一人で、アングス (Angus) およびミアーン (Mearns) の地域に関連する Circinn の種族であろうと推測される。オエンガス 2 世の事績には、X 形十字とセント・アンドリュースの創建を上げることができる。最初に、X 形十字について概観しよう。X 形十字の使用とオエンガス 2 世の関係は、12 世紀以前からのセント・アンドリュースの建設に関する伝説に基づいている。これによると、オエンガス 2 世と彼の軍に聖アンドリュースの助けによる勝利をもたらしたことになる。これに感謝して、ピクト人は聖アンドリュースを崇拝するようになった。その時の彼らの敵は不明である。この X 形十字は今日のスコットランドの国旗である。次に、聖アンドリュースの創建について概観しよう。聖アンドリュースの創建は、オエンガス 1 世あるいはネフタン 7 世であると考えられる。聖アンドリュースの初代大修道院長は、テュアサラン (Túathalán) (747 年没) であり、彼は 747 年に死亡している。このことから、その創建は、オエンガス 2 世の治世以前であったと理解される。

聖レグラス (あるいは聖ルール) (Saint Regulus あるいは Saint Rule) (生没年不明: 4 世紀) は、スコットランドの伝説によると、聖アンドリュースの骨を持ってスコットランドに逃げて来て<sup>66</sup>、それを聖アンドリュースに置いた<sup>67</sup>。レグラス伝説によると、聖レグラスは、ファイブのキリモント (Kilymont: 現在の聖アンドリュース) 海岸で難破したが、8 世紀から 9 世紀のピクト王アングス (伝説からこの王がオエンガス 1 世であると解釈される) に歓迎された<sup>68</sup>。修道院では、聖アンドリュースの 3 本の右手の指、上腕、膝の皿、および一本の歯

<sup>65</sup> オエンガスは、神話的にはゴイルプア・ルアハラ・クイルク (Coirpre Luachra mac Cuire; 別名 Coirpre Cruithnchán) (5 世紀中頃) の子孫とされる。彼は、ピクト王 feredachm の娘 Mongfind の息子ゴナル・コルク (Conall Corec) であった。ゴイルプアは、ゴナル・コルクがスコットランド逃亡中に逗留したときに宿されたと推測される。

<sup>66</sup> 聖レグラスは、ローマ皇帝コンスタンティヌスが聖アンドリュースの遺物 (骨) をパトラス (Patras) からコンスタンティノーブルに移すことを計画していたので、彼はそれをできるだけ遠くに持っていかうとし、スコットランドの聖アンドリュース (当時はキリモント; Kilymont) に持ってきた。

<sup>67</sup> 伝説では、彼は、聖アンドリュースの骨を Forteviot に持ってきた。

<sup>68</sup> しかし、聖レグラスは 4 世紀の人であり、オエンガス 1 世紀は 8 世紀の人である。時代がかみ合わない。どのように理解することができるのであろうか。

を持つことを求めた。この伝説は、12世紀以降のピクト王や貴族や聖職者によって公表された。11世紀後半以降、スコットランドの独立は、イングランドの恐怖の下にあった。また、スコットランドの教会は、ヨークの大司教と大司教の座を巡って争っていた。イングランドからの独立のためには、スコットランドにはイングランドとは異なった教会体制が必要であった。4世紀に聖人としてアンドリューを選択していたという伝説を奨励し、最高級の聖人であり、かつ、イングランドの聖人とは異なるアンドリューを聖人として選び、その伝説によって、スコットランドはイングランドやアイルランドのキリスト教の改宗の前に、スコットランドの教会の創建がなされたことを示したことになる。その創建の日付を4世紀にすることができた。イングランドやアイルランドがキリスト教に改宗したのは、5世紀から6世紀にかけてである。

### 2.2.3 オエンガス王朝の滅亡

次の王は、ズレスト9世(Drest IV) (在位834年-837年)で、コンスタンティン王の息子であり、オエンガス2世の甥であった。この王の事績は不明である。次の王は、ウエン(UenあるいはEógannan mac Óengusa)<sup>69</sup> (在位837年-839年)で、オエンガス2世の息子であり、ズレスト9世とは従兄弟であった。彼は、叔父のコンスタンティン王と同様にノーザンブリア修道院の保護者であった。『Annals of Ulster』では、839年にヴァイキングとFortriuの人々との戦いでウエン王および有力なピクトの多くの人々の死亡が報告されている。オエンガス1世からの王朝は、ヴァイキング侵攻とその闘いのために途絶えた。<sup>70</sup>

## むすびにかえて

本稿では、ピクト王国の王の系譜と、その支配領域やその宗教について考察した。6世紀後半のブリディ1世の王宮はインヴァネス付近のクレイグ・ファドリクであった。そこを王宮としてピクト王国を治めて、ピクト人の宗教拠点をポートマホマックに置いたのかも知れない。Nechtan Morbet王はパース南東のアバーネシーを首都とし、そこに修道院を開い

<sup>69</sup> 彼以降の王は、フラズあるいはフェラト(UuradあるいはFeratあるいはUuerat son of Bargoit) (在位839年-842年)、ブリディ6世(Bridei VI) (在位842年)、キニオズ2世(Ciniod II) (在位842年)、ブリディ7世(Bridei 7世) (在位842年-845年)、ズレスト10世(Drest V) (在位845年-848年)と続く。この王朝はオエンガス1世の王朝とは異なる。この次の王がケニス1世(Kenneth IあるいはKenneth MacAlpin) (在位846?-858年)であった。

<sup>70</sup> ピクト王国は、徐々にダル・リアダ王国と混じり合い融合し、ノーザンブリア王国の政治的影響を受け、アルバ王国を形成するようになったと考えられる。ストラスクライドにあったブリトン人のアルト・カルト王国やアングル人の王国ベルニシア王国を吸収し、アルバ王国は拡大し、11世紀にはピクト人のアイデンティティとスコット人のアイデンティティが混合・融合し、一つの独立国を形成したと思われる。

た。6世紀後半から7世紀にかけて、ネフタン3世がピクトの勢力をアルト・カルト王国にまで広げ、タロルガン1世は、ノーザンブリア王国と連携しながらダル・リアダ王国に圧力を掛け、その一方でノーザンブリア王国に臣従した。しかし、ブリィディ3世は、その領土を南に広げ、南ピクトと戦争をし、685年にダンニヘンの戦いでノーザンブリア王エクフリスに勝利し、その宗主権から抜け出した。ネフタン4世は、ブリィディ4世と共に、聖アトムナンのルールを保証し、さらに、アイオナの修道士を追放する教会改革を行い、復活祭の日付をアイオナの伝統からノーザンブリアの伝統に変更した。ピクト王国の教会の独立に道筋をつけ、彼が修道院に入り王位をズレスト7世に譲ると、ピクト王国は戦争状態に突入したが、オエンガス1世はその内戦を治め、ダル・リアダ王国を従属させた。コンスタンティン王は、彼の息子をダル・リアダ王国の国王とし、アルト・カルト王国を征服しようとした。だが、ヴァイキングの侵攻のため、ピクト王国もダル・リアダ王国も勢力を失った。両国では新たな為政者が必須であった。

#### 参考文献

- マックス・ウェーバー 著 (大塚 久雄訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月  
スマウト, T. C. (木村 正俊監訳) 『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月  
アダム・スミス 著 (大内 兵衛・松川 七郎共訳) 『諸国民の富』(四) 岩波文庫 1992年4月  
ジェフード・デランティ 著 (山之内 靖・伊藤 茂共訳) 『コミュニティ』NNT出版 2007年4月  
David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年  
ジョン・ロック 著 (鶴飼 信成訳) 『市民政府論』岩波文庫 1971年1月  
ジョン・ロック 著 (加藤 節訳) 『統治二論』岩波文庫 2010年12月  
(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)